

通天閣のイメージ変遷に関する研究

参河 祥道¹・岡田 昌彰²

1 学生員 工学士 近畿大学大学院 総合理工学研究科 (〒577-8502 東大阪市小若江 3-4-1)

2 正会員 博士 (工学) 近畿大学講師 理工学部社会環境工学科 (〒577-8502 東大阪市小若江 3-4-1)

本研究は、歌謡曲の歌詞および雑誌記事における表現の変遷をもとに、通天閣に対するイメージの変遷を明らかにした。竣工当初は「高さ」とそれに付随する超越的イメージが投影されるが、その後周辺地域の高層化及び成長の価値低下という物理的・社会的環境の変化に伴い、超越的イメージが概念化・減衰するとともに日常風景化の進行と親密的イメージの現出が見られる。近年その高さは、展望台からのパノラマ体験によって認識されていることがわかった。

Key Words: Tower Structure, Tsutenkaku, Landscape, Image

1. 研究の背景と目的

塔状構造物は、高さをもち地域においてもひときわ目立つ構造物であり、実用性以外のさまざまな意味を連想させる。近隣地域のランドマークや地域シンボルとして捉えられることも少なくない。近年では“新東京タワー”の争奪戦なども新聞記事¹⁾にて話題になっているほか、2003年に始まった地上波デジタル放送の開始に伴って500m級の高さをもつ塔の必要性も議論されている。東京やさいたま市などでタワーの誘致合戦が加熱しているが、これはシンボルとしてのタワーの潜在力を端的に示す出来事であるといえる。

本研究では、大阪のシンボルともいえる通天閣(図一1)を題材とし、通天閣に対する認知・評価の変遷と実態を明らかにすることを目的とする。通天閣を取り巻く社会的背景の経緯を整理し、歌謡曲の歌詞および雑誌記事を用いたテキスト法^{補注(1)}によりイメージの変遷を把握する^{補注(2), (3)}。ランドマークであると同時に人々の感性に訴えかける存在として通天閣の位置づけを明確化し、今後の塔状構造物における景観形成や地域づくりに資しうる知見を得ることとした。

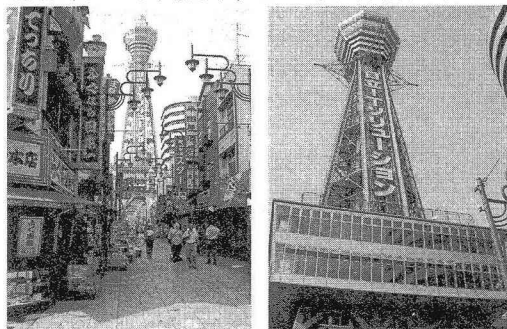
通天閣のイメージ研究としては、岡田・参河による塔状構造物のシンボル特性の研究²⁾があるが、共時的研究に帰着しており時間軸を伴った研究には至っていない。塔状構造物の通時的イメージ研究としては篠原らの研究³⁾があるが、対象は東京タワーに限定されている。橋川⁴⁾は大阪の都市開発史・盛場

研究という観点から通天閣と大阪の近代化過程について研究を行っているが、通天閣に対し具体的に抱かれたイメージについては言及していない。

2. 通天閣の系譜

(1) 通天閣の経緯(表一)

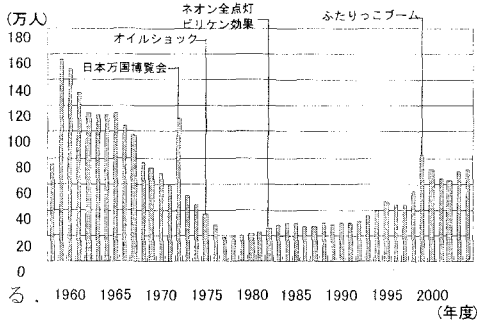
通天閣は、一大歓楽地「新世界」の中心的施設として1912年に竣工した。パリのエッフェル塔と凱旋門がモチーフとされ、東洋一の高さで人々の目を引いた。1943年の火災とその後の鉄材供出の必要性から一旦は解体されている。戦後、地元市民から通天閣再建の声が起こり、1956年に実現している。1960～70年代には地下にフィッシュセンターや囲碁将棋センターなども付設されている。1957年にはネオンが点灯しているが、オイルショックにより1973年に一時中断され、1979年に再点灯されてい



図一1 通天閣の現況(筆者撮影)

表—1 通天閣における主な出来事

年	主な出来事	年	主な出来事	年	主な出来事
1912	初代通天閣誕生	1957	ネオン灯の点灯	1976	地下「囲碁将棋センター」開館
1920	ライオン歯磨きの広告設置	1962	王将祭開始	1979	ネオン再点灯
1943	塔脚部の映画館火災	1963	スモッグ問題発生	1980	ビリケン像完成
	鉄材献納による崩壊	1968	地下「フィッシュセンター」開館	1996	ふたりっ子ブーム
1956	二代目通天閣完成	1973	オイルショックによるネオン消灯		



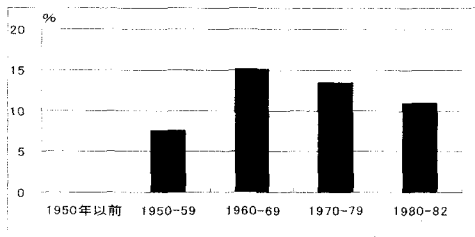
図—2 年間来塔者数の変遷

る。また、既往研究においては東京タワーに比して周辺地域（新世界地区）とのイメージ的結びつきが地元で相対的に高いことが指摘されている²⁾。

また、1980年以降は流行したテレビドラマや映画の舞台としても利用されている。

(2) 来塔者数の変遷(図—2)

通天閣の年間来塔者数は竣工年（1957年）の翌年は155万人であったが、その後徐々に減少し始め、万国博覧会が大阪で開催された1970年に一時的に来塔者数が年間100万人を超えるものの1975年には19万人まで落ち込む。ネオン再点灯翌年の1980年頃からは来塔者数が回復の傾向を示し、1996年には年間82万人まで回復している。



	1950年 以前	1950 -59	1960 -69	1970 -79	1980 -82	不明	合計
通天閣 歌数	0	3	21	19	5	0	48
全歌数	84	40	139	142	46	12	463
通天閣の 歌われる 割合(%)	0.0	7.5	15.1	13.4	10.9	0.0	10.4

図—3 通天閣の歌われている割合

3. 通天閣のイメージ変遷

(1) 歌謡曲にみる通天閣のイメージ変遷

次に、通天閣に関する内容の歌われた歌謡曲の歌詞をもとに、通天閣に抱かれたイメージを分析する。データソースとして「大阪のうた」（1982年大阪都市協会発行）^{補注(4)}を用いた。全463曲中、通天閣に関する歌詞を含むものは48曲存在した^{補注(5)}。なお、歌謡曲は公衆の娯楽対象として作られていることもあり、歌われた内容も肯定的なものが殆どとなっている。通天閣は1956年から1981年にかけて歌われているが、1960年代に15%強に達し、その後漸減傾向にはあるも1980年代初めまで10%強の割合で歌われている（図—3）。

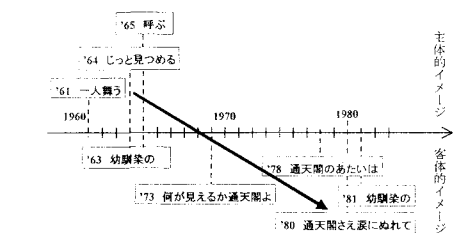
ここでは、それぞれのデータの中に登場する歌詞の語句から「人間化」「高さ」「根性」という項目に分類し分析を行った。

a) 人間化表現の客体化（図—4）^{補注(6)}

歌謡曲の中には、通天閣を人間化（擬人化）しオブザーバー^{補注(7)}の思いを投影するものが見られた。1960年代までは「舞う」（大阪の夜：1961年）、「じっと見つめる」（大阪スーベニア：1964年）、「呼ぶ」（夫婦善哉：1965年）などのように、通天閣がオブザーバーに対して主体的に働きかけてくる“主体的イメージ”となっている。いっぽう年代が進むにつれ「何が見えるか通天閣よ」（大阪浪花節：1973年）、「捨てられた通天閣のあたい」（大阪おんな：1978年）、「通天閣さえ涙にぬれて」（大阪そだち：1980年）などのように、オブザーバーが通天閣を自分の感情や境遇と一体化させる“客体的イメージ”への変貌が読み取れる。

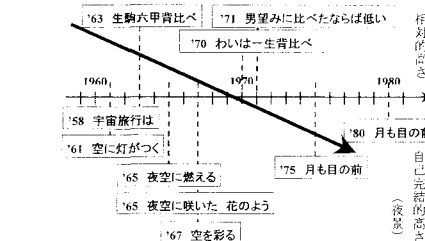
b) 相対的な高さ認識の低下（図—5）^{補注(8)(9)(10)}

通天閣に対し「高さ」のイメージが一貫して想起されている。「夜空に燃える」（大阪の夢：1965年）、「夜空に咲いた花のよう」（浪花っ子：1965年）、「月も目の前」（なにわ音頭：1980年）のように夜景による自己完結的な高さが一貫して歌われている。また、1963年には「生駒六甲との背比べ」（新大阪音頭）のように他の事物との比較による相対的な高さに関する記述が見られるが、それ以降このような記事は見られなくなる。「通天閣とわいは一生背くらべ」（浪花ど根性：1970年）、「男望みに比べたなら



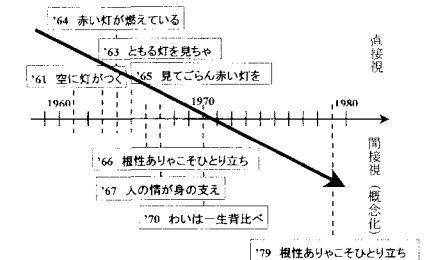
発表年	タイトル	通天閣の表現
1961	大阪の夜	大阪の夜みかえれば 通天閣も一人舞う
1963	通天閣	幼馴染の通天閣に ともる灯を見りや只泣ける
1964	大阪スーベニア	星が涙かああ手をふる俺を じっと見つめる通天閣よ
1965	夫婦善哉	ええやないかないか通天閣の 赤い灯が呼ぶ誰か呼ぶ
1973	浪花花柳	何が見えるか通天閣よ 明日と云う目が見えるかい
1978	大阪おんな	ヤヤ子生まされて捨てられた 通天閣のあたいはアホな女やで
1980	大阪そだち	ほんまに辛いわどないしうネエ方 通天閣さえ家にぬれて
1981	あなたの大阪	幼なじみの通天閣に どこかよく似た影をひく

図—4 人間化表現の客体化



発表年	タイトル	通天閣の表現
1958	大阪まつり	宇宙旅行は通天閣で 可愛いスターと恋をした
1961	王将	空に灯がつく通天閣に おれの闘志がまた燃える
1963	新大阪音頭	風も輝く通天閣に 生駒六甲背くらべ
1965	大阪の夢	夜空に燃える通天閣の 灯りは生命の灯びよ
1965	浪花つ子	通天閣のあかい灯を 夜空に咲いた花のよう
1967	大阪情話	空を彩る通天閣を 一緒にみるのも
1970	浪花ど根性	やるぞなにくそ通天閣と わいはい一生背くらべ
1971	浪花太鼓	男のぞみに比べたならば 低いもんだよ通天閣も
1975	なにわ音頭	月も目の前通天閣は ダイヤモンドの街あかめ
1980	浪花夜景	月も目の前通天閣は 情ふれあう新世界

図—5 相対的な高さ認識の低下



発表年	タイトル	通天閣の表現
1961	王将	空に灯がつく通天閣に おれの闘志がまた燃える
1962	浪者の勝負歌	胸に燃いた浪花の塔に わいが死んでも灯はともる
1963	通天閣	ともる灯を見ちや 強く生きるぞ通天閣よ
1964	大阪の夜	あとふりかえりや通天閣の 赤い灯がもえている
1965	大阪の夢	夜空に燃える通天閣の 灯りは生命の灯びよ
1965	浪花つ子	泣いていないで見てごらん 通天閣のあかい灯を
1965	浪人のれん一代	通天閣の赤い灯よりも 胸を燃やしたど根性
1966	なにわ音頭	ハア浪連繁昌の通天閣も 根性ありやこそひとり立ち
1967	浪花の勝負歌	王将坂田と通天閣は 人の情が身の支え
1970	浪花ど根性	やるぞなにくそ通天閣と わいはい一生背くらべ
1979	泣かへん	通天閣は 根性ありやこそひとり立ち

図—6 “根性” 投影の概念化

ば低いもんだよ通天閣も」(浪花太鼓：1971年)も

「わい」「男望み」という明快な比較対象をもってこの「相対的高さ」に分類されるが、「生駒六甲」が視覚的な比較であるのに対し、これらは観念的な比較となっている。比較対象が第三者の事物ではなくオブザーバー自身であることも特徴的である。

c) “根性” 投影の概念化 (図—6)

通天閣には「根性」という特徴的な概念の投影が見られる^{補注(11)}。1965年頃までは「空の灯」(王将：1961年)、「ともる灯」(通天閣：1963年)、「赤い灯」(大阪の夜：1964年)などのように、灯を直接視してその背後に「根性」を投影するものが見られるが、その後「根性ありやこそひとり立ち」(なにわ盆歌：1966年、泣かへん：1979年)などように直接視することなしに概念的に通天閣に根性を投影するものが次第に見られるようになる。

(2) 雑誌記事にみる通天閣のイメージ変遷

次に、雑誌記事における通天閣の描写内容の変遷を検討した。雑誌もまた歌詞曲様に大衆を対象としたテキストであり、各時代の社会的価値観をある程度反映しているものと捉えられる。ここでは、「大阪人」^{補注(12)}「大阪春秋」^{補注(13)}「通天閣30年のあゆみ」^{補注(14)}における記事の中から、通天閣を扱ったものを抽出し、その内容を分析する。

a) 日常風景化 (表—2)

1936年には「日が暮れるとイルミネーションの文字が遠くから見えた」というように通天閣は新しく物珍しい存在であったが、その後「いつも眺めながら通っていた」「あまりにも身近にあり、どこからでも見えた」などのように日常的に眺められる過程が確認できる。

b) 高さ認識の低下と展望台の役割 (表—3)

当初は「見上げて嘆息している」などのように通天閣の高さに対する畏怖の念が表現されている。展望台からの眺めも「飛行機から地上を眺めるよう」「上からワッ言いながら景色見ていました」のように驚きの気持ちをもって捉えられていたのがわかる。1960年頃から「高層ビルなどでもはや103mの展望は行って登るほどのものではない」というように、周辺の高層化により高さの印象が希薄化する。1970年には「高さはそれほどでもない」「ノッポで売の時代も終わる」というように、高さの価値そのものの低下を示す記述も見られる。近年では、「ひさしぶりに登った通天閣はやはり高かった」という表現が見られ、高さが展望台を訪れることによって再認識されている。現在でも展望台からの眺望は「眺めは趣がある」「夕暮れになると眺めが綺麗」というように評価されているのがわかる。

c) 心の支え (表—4)

表－2 日常風景化に関する記述

年補注(15)	作 者	記述内容	掲載雑誌
1936	永田 昌雄	日が暮れるとイルミネーションの文字が遠くから見えた	大阪春秋
1936	松葉 健	幼稚園からの往復は阪堺電車に乗った。いつも通天閣を眺めながらの毎日だった	大阪春秋
1950 頃	はるき悦巳	あまりにも身近にあり、どこからでも見えた。いつも通天閣があった	30 年のあゆみ
1956	(明記なし)	学校へは通天閣を眺めながら通った	大阪人
1987	香川 登枝雄	近くから見上げるとは大好きだ	30 年のあゆみ
2002	枝川 公一	早朝の通天閣を見上げるのは、これが初めてだった。ひたすらに感動した	大阪人

表－3 高さ認識の低下と展望台の役割

年補注(15)	作 者	記述内容	掲載雑誌
1936	永田 昌男	通天閣高い、高いは煙突	大阪春秋
1936	(明記なし)	みんな上を見上げて嘆息している。こわいほど高かった	大阪春秋
1943	吉里 忠史	通天閣がジャックと豆の木のようにのびていた	大阪人
1943	竹島 昌威知	飛行機から地上を眺めるようだった	大阪春秋
1956	北脇 美代子	通天閣の上からフーッ言いながら景色見てました	大阪人
1960	松葉 健	高層ビルなどでもはや 103m の展望は行っているほどのものではなかった	大阪春秋
1970	松葉 健	客足も減少、ノッポで売る時代もおわる	大阪春秋
1970	(明記なし)	高さはそれほどでもない	大阪春秋
2002	大山 某	ひさびさに昇った通天閣はやはり高かった	大阪人
2002	(明記なし)	展望台の眺めは趣がある	大阪人
2002	北脇 美代子	夕暮れになると眺めが綺麗。天国はこういう物かと考える	大阪人

表－4 心の支え

年補注(15)	作 者	記述内容	掲載雑誌
1960 頃	水島 新二	生身の人間のように血が通うてそのうえ暖かい。苦しい時いつも支えだった	30 年のあゆみ
1960 頃	藤本 義一	自分を一匹の魚と考えた場合、通天閣は貴重な鱗となって守ってくれる。通天閣を中心に歩んできた。	30 年のあゆみ

表－5 親密的イメージ

年補注(15)	作 者	記述内容	掲載雑誌
1987	難波 利三	通天閣に一週間も会わないと落ち着かなくなる。 日に一度通天閣を見ないと寂しい	30 年のあゆみ
1999	坂本 順次	そこを去るときふと振り返って「また来るね」と声をかけられる存在	大阪人
2002	北脇 美代子	ここがあたしの人生の一番大事な場所	大阪人

1960 年代より「苦しい時いつも支えだった」「貴重な鱗となって守ってくれる」などのように、心の支えとして通天閣を表現するものが見られる。

d) 親密的イメージ (表－5)

1980 年代後半より、「会えないと寂しい」「また来るねと声をかけられる存在」というように、通天閣に対し親密感を抱くイメージが存在している。

4. イメージ変遷のまとめ

以上より、通天閣に対するイメージの変遷を以下のように総括する。

竣工当初は通天閣の威容ともいえる「高さ」が認識され、それに付随する「根性」「畏怖」「頼り」といった超越的イメージ^{補注(16)}が投影されている。やがて周辺地域の高層化による相対的高さの低下という物理的環境や、高度成長時代の終焉による成長そのものの価値低下という社会的環境の変化に伴い、高さの認識に付随する形で通天閣に投影されていた超越的イメージの一部は減衰・概念化(例えば、根性の投影等)するとともに日常風景化と親密的イメージの現出がみられる。通天閣は自我そのものの境遇

を投影できるほど身近なものとなっていく。近年において通天閣の高さは、夜景や展望台からのパノラマを体験することによって認識される傾向が見られた。

本論文では、塔状構造物の視覚像に対する価値の可能性とその変遷過程を部分的に示した。塔状構造物の景観設計に関しその方法が既に指摘されている⁸⁾が、本論文の知見は、例えばオブザーバーの事後評価を見越した構造物のデザイン手法、あるいは塔状構造物を有する地域の景観づくりを議論する上での現存の構造物に対する価値の置きどころを示唆する可能性がある。イメージ変遷の諸相や一般性を引き出すべく、他の塔状構造物における比較検討、さらには時間軸を伴った全体的なイメージの変遷とその要因の詳細な検討が今後の課題となるものと考えられる。

【補注】

- (1) 歌謡曲の歌詞や雑誌記事の記述を資料としたイメージ分析は数多くなされているが⁶⁾、本研究では「大阪」という限定された地域を対象として扱っているデータを用い、分析を行っている点が特徴的と言える。大阪のように特定の都市のみを対象とした歌謡曲や雑誌記事の存在自体が特徴的であるともいえる。また、既往研究の中には小中学校の文集テキストや祭りなどの表象をイメージ分析データとして用いているもの⁷⁾も存在している。塔状構造物のイメージ分析データとして必ずしも本論文における2データが絶対的に有利ということは断定できないものの、人々の通天閣に対するイメージの変化が読み取れるタイムスパンを包含している点でも、イメージ変化を説明する上で有益なデータの1つであると判断した。なお、対象年代において一貫したイメージデータを用いることが本来理想であるが、本研究においては入手可能であった2種類のデータを統合し、その変化が見られたスパンにおいて分析を行っている。イメージ変化の特徴を把握する上でこの手法も有用であると判断した。
- (2) 本研究で用いるデータによって把握されるイメージは主に「大阪人により形成されたイメージ」である。既往研究²⁾においては現在の大阪圏内外における通天閣のイメージの相違が共時的に示されており、本研究のような通時的研究においても大阪圏内外のイメージ相違が予測される。本研究の発展的課題として挙げておきたい。
- (3) 本研究で用いたイメージデータのうち、「大阪のうた」は商品レコード化されたものが収録されており、また各雑誌も執筆者は個人であるも関西の大衆にひろく認められているものであることから、大阪人のイメージがある程度代表するデータであると判断し、分析データとして採用することとした。
- (4) 明治時代から1982年までの間に発行された大阪当地の歌謡曲が収集されている。なお、1982年から現在までの歌謡曲データは得られなかったため、本章ではこの時代区分のみでのイメージ変遷を把握することとした。
- (5) その他のインフラでは橋や御堂筋なども歌われているが、これらの描写内容について通天閣のような明確な経年的変化は殆ど見られなかった。48曲における作詞家は各1名（重複あり）で、全38名の作詞家によって制作されている。
- (6) ここでは、通天閣側からみた擬人行為の「主体性」「客体性」に着目し分析を行っている。「主体的イメージ」とは、「舞う」「じっと見つめる」などのように通天閣そのものが主体的に発している行為の表現であり、いっぽう「客体的イメージ」とは逆に通天閣に対しオブザーバー^{補注(7)}が主体的に感情移入・自己同一化を行っているものを指している。後者はオブザーバーVS通天閣という対峙において、オブザーバー主体、すなわち通天閣が客体的行為として人間化されていることを意味している。例えば、「何が見えるか通天閣よ 明日と云う日が見えるかい」などは、「見える」という状態にあるかどうかをオブザーバーが主体的に通天閣に問いかけていることから、「(通天閣にとっては)客体的表現」に分類している。
- (7) 直訳すれば「観察者：observer」となるが、ここでは「景観を見る側」という意味で用いることとする。
- (8) 「相対的」とは、「他との関係・比較の上で成り立っているさま」（三省堂「大辞林 第二版」）と定義される。「生駒六甲との背比べ」（新大阪音頭）では、「生駒」「六甲」という既に絶大な「高さ」を有する他の事物との比較によって高さが表現されており、この意味では「相対的な高さの認識」と捉えられる。

- (9) 「夜空に燃える」「月も目の前」などは、夜の闇に隠れた周囲から浮かび上がる通天閣の視覚像を表現したものである。いずれも「空」「月」「宇宙」など、上空を意味する用語を伴うため、本論文ではこれらも「高さ」表現として整理したが、補注(8)のように高さについて明快な比較対象をもつ「相対的高さ」とは性格を異にするため、ここでは高さについて明快な比較対象を伴わない「自己完結的高さ」として分類することとした。
- (10) 夜景によって浮かび上がる通天閣の高さを伴う視覚像が表現されている。また、「通天閣とわいはい生背くらべ」（浪花ど根性：1970年）、「男のぞみに比べたならば低いもんだよ通天閣も」（浪花太鼓：1971年）のように「相対的高さ認識」は70年代以降にも見られるが、比較対象が第三者の事物ではなくオブザーバー自身^{補注(7)}となっていることが特徴的である。
- (11) 「根性」が通天閣に投影されるに至った理由や経緯については定かではないが、1961年の村田英雄氏による「王将」のヒットがこのイメージを定着させたものと思われる。この曲は当時としては破格の記録である150万枚を売り上げている。
- (12) 1999年に（財）大阪都市協会によって創刊された雑誌で、大阪の風物や風俗などが詳細に記されている。
- (13) 1982年に大阪春秋社によって創刊された雑誌で、歴史、文化、産業など、あらゆる分野について「大阪」を掘り下げレポートされている。
- (14) 通天閣観光株式会社により、2代目通天閣の30周年を記念して1987年に発刊された機関誌で、通天閣の歴史や思い出などが綴られている。
- (15) 掲載年および懐古年を示す。
- (16) 「超越的」とは、「普通の程度をこえ、すぐれていること。何ものかを超え、その外または上に位置すること。世界の創造主として世界を超えている神、意識によって定立されるのではなくそれから独立する存在など」（三省堂「大辞林 第二版」）と定義されている。本論文における「根性」「畏怖」「頼り」それぞれの投影は、通天閣がオブザーバー自身に対しそれぞれ「根性を与えうる存在」「畏怖の念を与えうる存在」「頼れる存在」であること、すなわち「オブザーバーを超え、すぐれている存在」であることが前提となるイメージと考えられることから、ここでは「超越的イメージ」という用語にて説明することとした。なお、このイメージは、根性イメージのような「概念化」、さらには親密的イメージの現出による「減衰」が進行する傾向にある。

【参考文献】

- 1) 例えば、朝日新聞1998年9月27日号においても、さいたま市や東京都多摩市による「新東京タワー」の誘致合戦に関する記事が掲載されている。
- 2) 岡田昌彰・参河洋道：塔状構造物のシンボル特性に関する研究、ランドスケープ研究Vol.67 No.5, 2004
- 3) 篠原慎太郎・岡田昌彰・中村良夫：塔状構造物のイメージ変遷に関する研究・東京タワーによるケーススタディ、環境システム研究No.24, 1996
- 4) 橋爪紳也：大阪モダン～通天閣と新世界、NTT出版、1996
- 5) 島兒伸次・仲間浩一・岡田昌彰：歌謡曲の情景描写からみた駅空間のイメージに関する基礎的研究、都市計画論文集29, 1994
- 6) 北原理雄・矢部恒彦・徳山郁芳：小学校校歌に謳われた全国の地域景観イメージに関する研究、日本建築学会計画系論文報告集472, 1995

- 7) 岡田昌彰：砒都・栃木葛生町におけるセメント工業イメージの変遷に関する研究，都市計画論文集 36，2001
8) 篠原修編：景観用語辞典，彰国社，1998

STUDY ON TRANSITION OF IMAGE ON TSUTENKAKU TOWER

This study attempts to manifest the transition of image to Tsutenkaku Tower with texts in lyrics of popular songs and expressions in magazines. After its completion, the image of transcendence with its height is reflected. In parallel with continuous constructions of skyscrapers in its neighborhood and reconsideration of high economic growth, the image of transcendence turns to be more conceptual and tenuous, and the tower is integrated as daily-cognitive landscape. These days its height is perceived particularly with the panorama from its observatory.